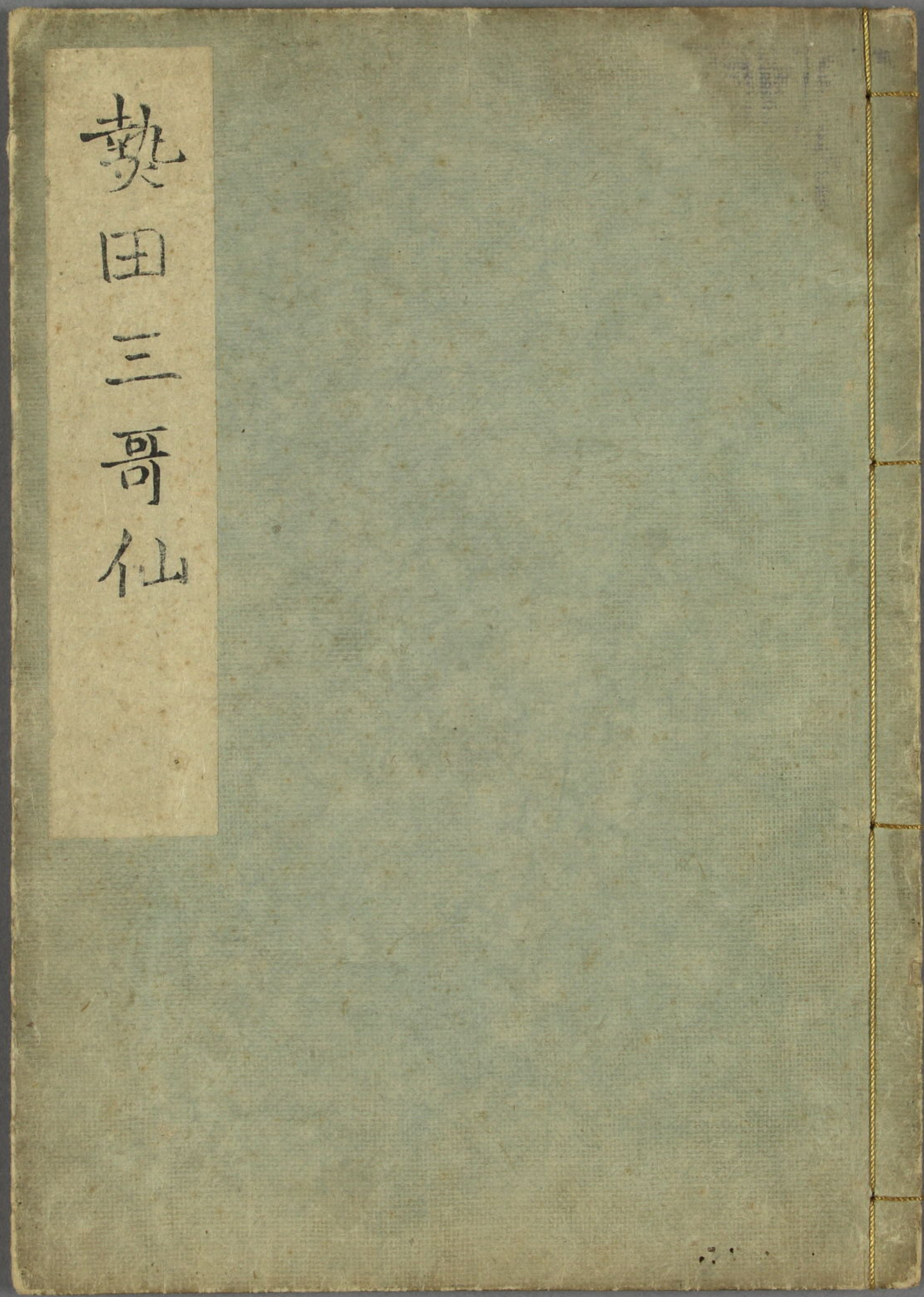




熱田三哥仙



三歌仙序詞

此集より名出居五歌仙あつて三哥仙ハ一雙に  
 えふひとや冬に日撰を年次へ別出せしむるは  
 卷の末のくみしむるは有少くも春に日の  
 ままに世に世に出しとて世にひくはあくやみ  
 多りふと覚申世に春のゆきをさして左の  
 こしとちしはつとといふあはれ<sup>トモカウ</sup>は熱田に  
 是れ五歌仙に今をてまはひたりとむかへ



二巻のちししを摘るるははらう蓬  
たふらひに船箱とらひしはるるは後乃り  
巻おつふとらひし書ありつ其終も多し  
廣くハ世と知れずありぬ芭蕉乃真享  
た一見おれしは後道とあらはれしは  
志原の一身ありしは十とせしは一と勢の  
冬に日のえらひを先とつぎの巻を  
骨髓を推ひ出されしは少くも  
骨髄を推ひ出されしは少くも

山陰道にありしは人々のあはれの中  
ぬきし七俳集とあらはれしは増し  
金科玉條ありしは抄るるも  
あしし初めはるる人は是を  
ぬきしをあらしはしはるる  
なれしは世にあらしはるる  
はるるは跡あらしはるる  
髪をあらしはるる即轉して

去てたつて古く平家おの川くちを  
くはとて了言て調ふかへて多むむかへぬ  
まはや古調のまゐるすありあゝんかたうし  
見くは三歌仙しり脱離乃時よあひて古義哉  
今を新しきとせく木上へ同志小約何へん  
暮雨巻曉臺亀手をたぐもくはこく城志すいふ

安永四未夏五月

自序はくはのやー素々なり  
進ひくはつてよふ

あそひまの録約くして七里人  
芭蕉

詠亭相宗のまゝに海へ  
くまを寄せまゝとて一福

此海小の録約くして一  
芭蕉

むくも傳へて波乃の  
桐葉

風ふを瓜ふくすと  
東藤

尾張の國勢田子まうりなまひんく  
師を乃海えんとて新しきまふ

海まで鴨のきくほのふ白

芭蕉

串に鯨魚あつれ 鱈

桐葉

二百年 龜山は斧とりて

東藤

橙の種ちく秋は来ふはる

工山

入月小鶺鴒イサガの鳥はわさるえ

桐葉

鳴るなると國はあふれり

芭蕉

障雨を走らぬ毎の洞のや

工山

一輪の草葉乃家

東藤

暮の二丈二日ともちる月とめて

芭蕉

周りに帰ると瓶ちかくあら

桐葉

雨は芝ほゆる河原道は草無り

東藤

山表もけり松の入口

工山

ひまゐりて衣のやま道繼居る

桐葉

秋のわづれの人 鳴ひふり

芭蕉

ほととひの聲は此濱を月沈く  
 此方の岸に 歌を書續く  
 花曇る 石の扉は 押むる  
 美人の形 浮むうけは  
 蝦夷の聲 ありあふ 響と 波と 傳て  
 けは 海風 下は 舟 油は ぬれたり  
 木の 下より あり 岸に 登り 白く  
 敷ふ ところ かの 十 たり 見ゆ

工山 東藤 桐葉 工山 東藤 芭蕉  
 東藤 工山 芭蕉

ほつくと 飽 寝 作る 袂 又 福  
 系より あり 一 痛の 呪 呪  
 不二の 根と 草と あり 馬は 系 あり  
 糸 あり 鶴の ひと あり 花 あり び  
 侍 あり 鏡と 志の ひ あり 袴 あり び  
 衣 あり 小 州 あり 秋 乃 戸 を 押  
 月 あり 神 あり 斗の 筈 あり 八つ あり 七  
 棺 あり 急く 消 あり ぬ の あり 蕉

東藤 桐葉 工山 東藤 芭蕉  
 桐葉 工山 芭蕉  
 芭蕉

破氷ふる具はと國よおらり  
高藤の賜ふ島作りも  
紅染乃産奥に木の香と授  
ちいさな宮の 永る日乃伽  
春雨の形は言猿首いま  
喜軒ちりい藤の撮ツナお

東藤  
桐葉  
工山  
芭蕉  
桐葉  
東藤

何れはちりい河やう産  
編笠しそく 蛙 聴居れ  
田標わす織の音乃あつたふ  
とちりい 若くは舟中  
月曇は雪の萩桐の下踏すけ  
酒飲心姨乃いふ海

芭蕉  
叩端  
桐葉  
芭蕉  
叩端  
桐葉

双六のうらみとみとみとまを——  
 奏の尻と——む袖の舞香  
 髪下と結後、娘おと後て  
 野、宮のあ——波ま寺の証  
 虚構にもささる料とわげ流  
 舞う若者ととむは若月の園  
 面水の舞女の秋の巻守る也  
 焚風をと志のふ ぬ 粉 四  
 芭蕉  
 叩端  
 相葉  
 芭蕉  
 叩端  
 相葉  
 芭蕉

川流り 誓と角子結ふて  
 今利と家滝ふ朝白く山路ふ  
 畏は石の浄座の花久——  
 羽織と酒風かゝる 榻屋  
 奇とみく女と誓ねくさるり  
 枕屋風の画ふおきくさるみ  
 聞なれ——笛の心路えれ遠路り  
 三の股のふゆ 深川 乃 友  
 芭蕉  
 叩端  
 相葉  
 芭蕉  
 叩端  
 相葉  
 芭蕉



菴位やひより杜律と味ひし  
 芥也あゝ牛一古き能き麦  
 以ふ鳴百舌をハ吹矢と負なり  
 水汲む小僧袖もやう  
 月明く折板山を登つらん  
 雪ハ表登の跡埋じなり  
 ちるるのそま折るる此皆  
 ちも何免乃 此 眞 小 音  
 叩端 相葉 芭蕉 叩端 相葉 芭蕉 叩端 相葉

笠にゆゑ人ハ津トとせしき  
 男やゆゑ人の老そく好ま  
 風くま大年の表乃七つや  
 市門をゆく 此 舞 の表  
 岩盤山を登り 此 山 吹く  
 家小孩を 連 奇 師 乃 松  
 芭蕉 相葉 叩端 相葉 叩端 相葉

右 蕉翁真蹟右幕雨菴



秋ハ程唯味多物味ハ  
白子のたまはつる昔の海  
浪もくさる鯨の骨も枯れ  
浪子ハ於朝のくさる道  
等持てあふさる 瘦男  
五重の塔のちり 夕暮  
鶴鶴乃尾松輪の囲ふ鶴も  
風小舟とまよふの 付死

桐葉  
工山  
東藤  
叩端  
芭蕉  
桂楫  
叩端  
桐葉

等とりて朴の唐もよと川 撓め  
田舎あつふお見えさるる  
うらうつく前ふれの音とあつ  
くもつとて 酒買ふ申く  
銀の鉢ふ 瓢おまゝあつ  
お何ん 弔京の 時分  
韃靼の 東の 寺に月清く  
猿も乃雲に 何とまよふ

叩端  
東藤  
工山  
桐葉  
芭蕉  
桂楫  
東藤  
叩端

蟬鳴くはるは涼の秋の空  
草屋の馬の尾の琴  
とちとちとち物焼くはるは涼  
入日の跡乃日 云 云  
宮の油さけつも米の奥  
はるは涼の空乃日乃日乃日

芭蕉  
工山  
東藤  
桐葉  
芭蕉  
桂楫

神前の茶店まで

志のよけく枯く候買ふ今も  
しるはるは涼の空乃日乃日

芭蕉  
桐葉

馬ささく海も雪の河

馬ささく海も雪の河  
木の葉よ 花の音 吹かすは  
はるは涼の空乃日乃日

芭蕉  
閑水  
東藤

翁みの路へうち都んや  
やえをれし

桐葉

松の雪をといのちのなをりうか

朽一つは 是はゆくとゆく

芭蕉

みーゆありし時やーるま  
ふーいまーく

芭蕉

唐直の鏡も清ーまのま

石ーく庭の寒きあつま

桐葉

翁居正人のほろけつ八橋の道  
標炭のこまーいれまをち鐵のて

霜の油まー株つむ別うま

桐葉

ねちーく

そ乃やのーり枯れぬれせま

東藤

みやちまあまひ  
影紅のまー梅森

梅白ーまのや枯れをひま

芭蕉

杉葉よあすも 半二つる一

京 秋風

+

我様船割 枇杷乃唐草

秋風

夕陽よりさく やまゝの 花

芭蕉

日のあ 花洞の 草とさくら

湖春

山家

櫻の木の 花を 掃るの 姿を仰

芭蕉

あふさく 古と さまよふ 舟つと

秋風

梅結く日永く 梅今之日

湖春

東の窓乃 替葉 つく

芭蕉

巢外中ふ 葉の 鳥の 並ひ居て

同

磯店即興

けしきく 夕陽より 船裂女

同

二年半とゆゑ 古友よ逢ふ

命二の 中ふ 活くは 梅う那

同

葉名りし

雪落し 箱白きこも 一寸

芭蕉

其名とわくく武の保川  
くつととて

思ひ出れぬもろや 四月に桜うり

同

糸の杖つく 但の まき麦

東藤

ふたひ熱田の草種をととて  
其氏初孫子のあはれあるしと  
やいよまゝおもひしもてあま  
りくつととて

牡丹葉分て 這ゆる 蜂乃名 孫小

芭蕉

とわくしひくつととて

うらハ 葉のまきつく 孫の 獨りか

桐葉

ひきもりし

笠さすや もしめ 寢も 春の 雨

芭蕉

途中 時雨

ふもあふ ちと 何なるか かく

同

名月や 舟堂の 轆く いて かり

江戸 其角

お舟乃 名月 橋の 長く

日 仙化

高や澄る 露の葉ゆく 朝花月

同 曾良

商人も見ゆる ほととぎす 船の月

同 文鮮

年一花きき 一花きき 日乃嵐

同 嵐雪

蓬萊や 伊國のかきり 松木山

ナコヤ 杜園

出舟や 磯見ゆき 鳴る雲花

長虹

夕べは 画よき 風乃 雲うな

越人

秋の日や ちゆく 動く 水のこ

荷兮

大万葉 くのさと 遠入 夢よりり

夕道

帰る 帆の ふくりに 海を 霧くち

一井

望 鏡や 志ほ 妹の 山さくら

鼠弾

腹の 鳴る 暮も 文なり 志ほ 雲花

且葉

秋 枯る 陣の 羽と 拾ひたり

東藤

元兆、喜下よきひく 炉の 南と

埋火の 南と ぬりけや せらむく

其角

日一 炉の 西と けらむ

一書の日や 泉中 ありて 流るる 山

野水



秋のり乃返そあまう乱まると  
去来

夜と空我とあまうや年の月  
如行

秋之の一よ空より月こり那  
前川

蜀黍乃陰とらるやあ時雨  
荷兮

宵戸見せし連くあけや茄子畑  
重五

酒うけて散るも今をり空の下  
長缸

熱田小舟にて

はるくあん此やうくあん神のほ連  
江戸  
当塗

わら魚の思くあまて月こり心  
魚児

紺ひしして底るい舞や移の智ひ  
曾良

春波乃あまうにさる白髪う南  
越人

本曾川の  
ほろりさ

流れもや舞のふれ鄭一公  
文州

昔まうし一輪よかりあまう  
舟泉

あま結ハ鶴さり低る入りう  
聴雪

正月ま初年るは空の空ひ  
羽笠

杜有氷より中ハ蒼うぬ  
伍よりに鶴物ハ一里うた  
人うろ有路ハあり魚うた  
露凍く竿にほ干に清く水

松芳  
卜信  
露川  
芭蕉

尾陽昌圭、もとあての句也、この  
集より凍解てと録す

附録

十二月九日一井亭興行

ふいふ様——君ハ何を乃夕月夜  
庭さへせ——はもたうの雪  
とや——と算をあやせ茶燈く  
葉の海をえふ清華あるう路  
葉の持の莖乃うとほふは  
陰子ゆれと 寺ゆり 燈火

芭蕉

一井  
越人  
昌碧  
荷兮  
楚竹

起もせても知る白ひたを路も  
乱き——髪のはねるに居る  
あけく寝く又さう寝るさうさ  
氣と鈴子の我ふ心——  
麻布を繕ひる程に織る  
甘藷と取らぬと移る世話——  
夕立の先よりの雷の音  
るもありぬ山溪の音

東睡  
芭蕉  
一井  
越人  
昌碧  
荷兮  
楚竹  
東睡

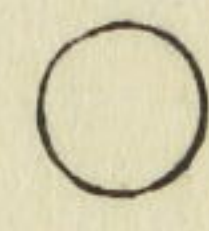
小胃と鹿のそれ矢と袖よりけさせ  
花あはれほとあつとあつ月  
風をかちけて赤のあつと  
鳥ふけく野に遠る

芭蕉  
越人  
荷兮  
昌碧

四季混雜

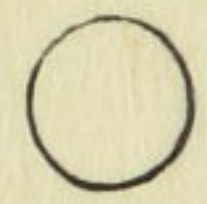
月雪の姿とあはれし風情の南  
 宿とあはれし花小の姿はみお織うれ  
 月たふく人の面とあはれし  
 暁のまよひの乃松  
 時雨すは日ハ折くそ志を終はれ  
 馬まきく六月まきく楠、下  
 夕ふハ又小雨と降く秋の暮

士朗  
 東壺  
 春幸  
 暁臺  
 文丞  
 趙鳥  
 方州



こほろき乃鬢つる髪は朝白うか  
 ぬ心のむかへくさなり 雲の影れも  
 清の月おき白ハ秋あはれ思ひあはれ  
 つもはなまきく、花あはれの小雪  
 芳山園ハ冬とあはれしひさし  
 虫あはれし初冬あはれし日あはれしな  
 のらくと柳こまきり 塘子

白園  
 五周  
 文丞  
 美角  
 駒六  
 入素  
 暁臺



瀬ふまゝ妹々姉妹の由松明

月満て静よ空の——くくも

昔浦めせ武門をう小静ちり

忘れ花よわすく残ぬ風の夕

草のよも乃白まよあふんち

舟路よとふく沖ゆくはてし

夜の月影まゝ夜の深くこえ

都貢

磨三

一素

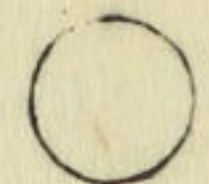
蕪博

方布

魚日

五田

田城



秋の江の舟小傘テは夕日

花の下よ静りす残らん 小サ刀

枸杞乃實のこぼれく霜のや寒

をちうえ印くくさるるまろく

本下川水いろあく秋くれぬ

あう——也樞ちろあま 砧う川

水くくろ活く流る春の貝

東壺

以南

士朗

萬岱

桃生

周夢

亞湍

越出雲時

田城

日

六

○

秋の風定よ月とて暮らゆ

子東

神鳴くも櫻にけり夕を

騏六

水鳥のこゑも川を流す

麥甫

瘦竹や水の流るる音も

六兔

枯葉のやうく高き霜の原

朱雁

人の心も一途涼し月

魯佩

青楓やあかきもの中よひと

杏溟

○

子規つねも春の限り車

宰馬

中をゆく日の入るる影も

琴宇

証もより叩くは時雨水

蘭雅

竹の門つと出く秋を分る

羅城

流きもや翅やふも山葵

婆良

鷺の羽ももつと落ちて月

窟志

ひと本よ花うそらや本権

東壺

九

○

蔓く水く新氣清く水く人

事紅

帯くくふもくく理んまがくく

方州

蓮くく 甘き心 餘く 風のわくく

矢作 焦尾

節くさや 雪の原く 鞆のねと

眞信史 南楚

あくく 移のねめくく 鷹ぬれ羽く

子東

秋の雨今く 流くぬ 山の中

猿眉

籠くたを月く 花くく ねくく

白圓

蓮切くく 子の花流く 水南く

亞滿

夕暮く 水札のく 入る 夏神く

入素

水く 流くく 流く 春のく 流く

臥央

鶯く 一羽くくく 人とく ちく ぬり

眞葉折元 回車

世の田植く ちく ちく ちく ちく ちく

曰浅香 露路秀

ゆく ちく ちく ちく ちく ちく

三州中垣内 李貢

のく ちく ちく ちく ちく ちく

都貢



利酒ふ酔うく庭もや秋の市  
 閑あふ落葉ふ中れ石落の毛  
 色うして菊あうひの白ひうが  
 花とあともまきゆめすううが  
 葉の香もあよここの星の園  
 早うてく枯叶の叶のむううが  
 啞蟬のまーいりもあうあられや

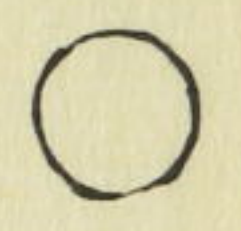
臥央  
 焦尾  
 白園  
 雪巢  
 姑半  
 充路  
 春幸



夕うほりああれさ由二日月  
 雪のうくあううぬらむ 能事の足  
 猛り人たたきくもゆん本とまひ  
 暑やあ日やゆくよ心のとくゆくと  
 日の朝也 氷柱はうて玉の露  
 月晴く池もくうう河あ乃秋  
 羅抱て夕まゝるん芦宮ふ

羅城  
 竹也  
 蟻冠  
 斗拙  
 士朗  
 烏雪  
 子東





秋風や ねる小妻よ 鶴のあー

大芝坊

秋もくやうく 菊うちと 中をなかり

以南

田畑もく 刈蒔く 申との 小家うけ

奥福島 島古

末の答あててもあつむ 糸あひ

帯梅

鹿乃く急 遊燈 帛の 色くそり

琴宇

更衣ひより 笑ひ 室の坊

曉臺

有る中よ 白蒲英よ 春の 露

寧馬

起く身は ちも 散ち けく ぬ

吞溟

山形梨や 野とあつりの 艾つんせ

朱雁

わ竹乃 五たみも して 涼しよ

一素

芦くれく 雨よ たらぬ 清く 卯

蕃洪

麥刈ー あとや 細江の ぬき 嵐

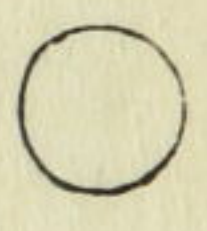
衆甫

給着く 申く 通く 文と ころ 多き 水

魯雄

又夜え 日の 光れ いと みる 雨

磨三



笑竹の海よやーちあやーとさ

曉臺

花ひらけあさり一口茄子うか

矢作 千久婦

蝶つー塘越えけ 日暮るな

洛 小沛

志こくと冷る日石のむらり

貞雅

新書や小舟渡ちる初月夜

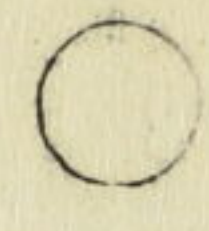
都賀

菊の山 只いー茶屋のきこ

是山

芥乃おとあーも入ーきあとの山

事紅



夕月や池一まゝ 梅のまを

南勢川寄 南河

小さーや細うの先のわいつあ

日 滄洲

夕暮や 江よ水乃をちま

日 楚竹

降る雪の果ちくみえて日ハ暮る

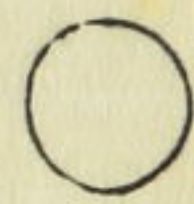
日 真魯

あほそー新樹のあー鳩乃なく

日 只浩

あけけーぬるあよむのあー川

日 逸漁



一 遠草千尺 寺の ありて

萬岱

後の月身とともそみて月の前

何大

そらけく水も程すむ影乃月小

文亟

里の小春 櫻くふ竹のそりて

趙危

日小海ひー色や 牡丹乃夕凋

嘯珂

松もろり青もが 何そと成ふを

一奎

月もゆ〜雪の降きて月見も

曉臺



